

近江の水をめぐる
3

石川
亮

Name :

ISHIKAWA Ryo

Title :

The Water of Omi : Part Three

Summary :

I began making artworks using water I collected from springs throughout Shiga Prefecture in 2010. This marked the start of what has become my ongoing investigation of the background and roots of the various springs of Shiga Prefecture, most of which have names that can be traced back to traditional stories, area names, and the like. The focus of my current research is on the life that sprang up around water sources and the cultures to which the water gave rise.

近江（滋賀県）の地の水探求はかれこれ六年が経とうとしている。自己の造形表現から始まった近江の水研究はアーティストステイトメント（作家の作品制作におけるスタンスや作品コンセプトの基本的な考え方やテーマ）をより強固で、私自身の自信に繋がる重要なウエイトを占めてきているとあらためて感じている。美術作家は作品制作を持続させながら、新たなリアリティ（現実感）を見つけ出し、言葉や文章でそれを残す事より優先して、絵であり立体などの作品として表現することで感覚や考えを確認したいのではないかと考える。勿論文字や言葉で思考しないわけではない。作品が仕上る過程において徐々に整理され、同時にぴたりくるタイトルや言葉、考えがまとまってきたところで漸く文章化されてくる。そしてそれが次の制作やアイデアを開く糸口になって行くのだと信じている。

近江をフィールドに基軸にした様々な学びにおいても水源を調べることは町や村の成り立ちや生活、生業を追いかけて行くのに有効な手段となっているのに気付いてきた。二〇一五年十二月に元金沢市長の町づくりに関する講演に携わる機会を得た。その際に事前に金沢市を知るため現地取材を行うことができた。

石川 亮

先ずはじめに調査したのはやはり水である。武家の歴史が色濃い城下町を形成する二つの川、そして城下に潤いを導く主要な用水は安定した政を推し進め生業と文化を育む原点である。そして「金洗いの沢」伝説を物語る湧水「金城霊澤」は城を形成する小立野台地に現在も湧き出ており、金沢の地名の由来になっている。また、私が幼少期から学生時代まで過ごした京都伏見も伏流水の伏水から由来していると聞いた事がある。ほぼ中心に位置する御香宮は今も「御香水」が湧き出ている。先日伏見を訪れ驚いたことに「伏見湧水マップ」が観光向けに発行されており、金沢同様、城下町であることから、交通の要衝、高台への築城そして裕福な水は必然的な条件なのであるに違いない。

近江の水研究は自己の表現から様々な思考へと広がる可能性となっている。それは暮しや生業、をみることから近代の生活が忘れてきた知恵や工夫、地縁や血縁の重要性を呼び覚まし、気付かせる学びになってきている様に感じている。

一、音の水、呼び名の水(おんのみず、よびなのみず)――

湧水は名称の無い、命名されるに至っていない水がある。もともと水場に名称をつけるといふ感覚がない時代(今日はすぐに観光地になり水場以上の存在感を放っているものもある。)から今日も途切れる事無く湧き出している水に迫りたい。

水場を発見すると一番に気になるのが名称である。これまでに紹介してきたように、取水口の脇に表札が立っており、きちんと名称と由来が書かれているもの、中には自然石に筆文字体で掘りこまれた堂々たるもの、一〇キロ先から道案内があるものなど今や地名よりも有名な存在になっている水がある。水場の名前を知ることとその周辺の地域の伝承や歴史が読み解けてくる。人物に由来するもの、周辺の植物に関係することなど、それが水の存在価値や威力みたいなものを表現していると言つてよいと考えている。

しかしどうだろうか、当時の水場(湧水)は今日、我々の生活以上に日常的且つ必要不可欠であったに違いない、いわば共同の生活インフラである。何処にでも存在し、誰となく周辺住民が呼び名で或は音で覚えており、あえて文字に書き起す程でもなかったであろう。これまでに現地の方々に幾度と名称と文字を聞き取りしてきたが、曖昧で微妙な名称や平仮名しか書き様が無いもの、音に漢字を当ててあるものが多い。おそらく名称よりも暮しや生活の現役選手であり、当たり前過ぎる存在だったのであろう。その代表的とも言える水を紹介していきたいと思う。

おいえのみず(大江の水、大江の泉)

近江八幡市の中心市街地の北に八幡山がそびえている。その南麓に街を象徴する日牟禮八幡宮がある。そこから東へ、山裾

に少し進むと北之庄という集落にさしあたる。村社である北之庄神社をすぎると更に道は狭くなり路地に迷い込んだ感じがする。角を曲がった辺に道標がある。そこを北へ足を進めると左手山側に赤い鳥居の稲荷神社がみえる。気をつけながらゆっくり進むと大江観世音と書かれた提灯がぶら下がる東屋に出会う。ちようどその手前山側にいりくんだ地形がありその奥が水場である。石柱で手前側と奥が仕切られ、見るからに古くから地域の方々が大事に受継がれてきた事が伺える。表札は無く、霊水である断りがさりげなく知らされていた。水近くの住人の紹介で北之庄自治会長をされておられた廣田平治（ひろたへいじ）さんにお話を聞く事ができた。廣田さんの祖父の言い伝えや現在も持続されている祭礼行事、地域に伝わることをお話いただいた。先ずはその名称から聞くと「おいえのみず」と呼ばれています。」理由おそらく、湧出量が多く周囲が小池のようになっている事から転じたのではないか、皆が迷い無く「おいえ」と音で受継がれて来た事から現在も「おいえのみず」と伝わっている。同じく観音さんもお稲荷さんも「おいえ（大江）の」と呼ばれているようだ。

以下廣田さんの調べを抜粋すると

近江蒲生郡誌によると、この泉の事を「大湯・朝日瀑ともいう美泉、岩角より湧出して冬暖かく、夏冷たく清冷に徹し、酒を醸し茶を品し製糸染布等にも適すとて、名泉の称古より高し。」と記されている。このため神泉として大切

にされ北之庄祭礼の稚児を初め参加者の清めとして用いられている。そのお刷毛の湯釜の水は、祭礼当日の〇時に稚児元を先頭に北之庄神社に参拝し、この泉まで塩で道中を清め桶二杯の若水を汲み使用する事になっている。また、北之庄墓地（三昧・さんまいと呼ばれている。）で使用する水はこの水を使い、帰る時はこの水で手足を洗い、穢れを落とすということになっている。湯口の石柵で囲まれた外の二面の水場は洗濯場となっており、上段が濯ぎ場となっている。洗濯機が普及するまで洗濯場として特に夏は大変賑わった。

と記されている。

廣田さんの家の前の道は往還（おうかん）と呼ばれ、現在の多賀町三叉路と鍛冶屋町に残る道標に観音正寺・長命寺の名称が刻まれていることから「西国三十三箇所札所巡礼の道で賑わった事が伺える主要な道（長命寺街道）であろう。」と話された。現在は一九三八年（昭和十三年）に開通した県道26号が数百メートル東を走りその役割をなしている。廣田さんは初見の私に対して、熱く丁寧に地域の歴史を当時の住民の立場に立ってお話して下さった。更に水場を保持するため北之庄とその周辺、自治体の間で様々な論争の歴史があり、今日に至っていると吐露された。史実や正史に残らない地域のリアリティーを記録し受継こうとする気持ちに心うたれた。今日も現代の様々な問題が日々勃発している。中でも宗教、信仰、文化の違



石柵の手前は生活の水、奥は霊泉



取水口の穴に柄杓を持って行く筆者



観音堂の左側奥手に水場がある

いによる対立は簡単に解決に至らない。

隠れた歴史を経て、途切れる事無く絶えず湧き出るこの呼び名の水に底知れぬ威力を感じた。普段は車で足早に通るすぎるのであるが、往還沿いに立ち並ぶ様々な北之庄史を感じながらこの地を後にした。

におうど（鳩戸、似小戸、仁王戸）

東近江市五個荘は近江商人を多く産み出した街である。旧中山道からびわ湖方向へ入った町並みは屋敷が多く建ち並び、用水路が走り江戸期の様子を今日に伝えている。その合間には森が散在し、寺社仏閣が多く立ち並ぶ事から信仰の熱い場所である事も間違いない。北東には愛知川が流れ、現在の御幸橋西詰辺りは旅人の往来で賑わったのであろうと想像する。現在の国道8号線築瀬の交差点より少し西に入ったところにこの辺りでも比較的大きな社、小幡神社がある。その前にコボコボと音を立てて水が流れ込んでいる池がある。厳密に言う和西隣の齡仙寺境内から一旦石垣の上に鎮座する龍を経由し、その口から池に向かって注がれている。齡仙寺住職の後藤慶裕（ごとうけいゆう）さんにお話を聞く事ができた。寺の歴史も平成八年に再販された齡仙寺三百年史があり、二言三言で済まされない程の濃厚なものであることを抑えておきたい。さてこの「におうど」であるが愛知川の伏流水であったと考えられる。山門前にある大人の背丈程ある自然石には「鳩戸霊泉」と篆書体で彫り込まれている。鳩は滋賀県の鳥でびわ湖を象徴する。その井戸が、鳩の湖の扉のごとく砂を吹き上げ溢れ出ていた事から今日にその名を伝えている。しかし一九七二年から始まった治水事業琵琶湖総合開発によりほとんど自噴能力がなくなつたそうだ。現在はポンプアップされ先程述べた龍の口に送られている。

次に滋賀県神社誌、小幡神社由緒をみると、

「創始の伝承はさまざまであるが、何れにしても似小戸とたたえる霊泉の四時滾滾と絶えることのない聖域に氏神の宮居を崇祀した父祖の深い祈りが偲ばれる。」

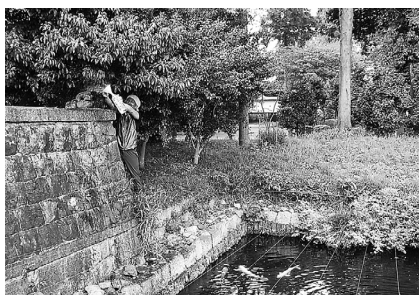
とある。更に、

「境内西南宮に清冽なる泉あり「似小戸」と称す。伊邪那岐命が禊し給うた橘の小戸にも似たる故を以てなり。近江輿地志略七十 春日霊水春日神社の界内にあり甚だ以て清潔の水なり。琵琶湖志卷十五 春日の霊水 小幡村に在り、小幡明神とて春日の神なり、この社内にあり清浄の霊水なり。淡海国木間攪卷六 小幡大明神 生土神なり 祭神南都春日神に同躰なり、名水当社の境内にあり、春日の霊水」と云い至って清潔の水なりと。」

と記されている。最後に一つ、後藤住職の話に戻るが、齢仙寺の鬼門にあたる毘沙門堂に仁王像の一部が置かれているそう。永禄年間の信長上洛による兵火で、伽羅全てを焼失してしまつたと伝わっており、山門の仁王像の一部が焼が残っているとのこと。その「仁王さんの井戸、仁王戸」と伝わる話もあるそう。いずれにしても「におうど」と地域の人々が呼んでいた事は間違いない。齢仙寺の名称の変遷も興味深い。明暦元年（一六五五年）九月、伽羅を建立され、霊像のある所に慈雲が棚引いていたことより霊像山慈雲寺と称し、後に門前に泉のあるところから慈雲山霊泉寺と言われるようになる。享保年間に寺内に不幸が重なつたため霊泉寺（霊が泉のごとく）から齢仙

寺（年齢が仙人のごとく）と改称され、現在に至っているようである。

神仏にゆかりのある地で人々の往来が有り、様々な物資や情報が行き交うこの地に湧きいずる水であるからこそ、様々な所以が残っている。亀や鯉、うなぎと一緒に暮らす放水池を眺めながら最近まで水を汲みに来ていた人々の様



石垣の龍の口より水を汲む



かつてはこの池から砂を吹き上げ湧き出していた



齢仙寺前に立つ鳩戸霊泉の石碑

子を想像した。

テンオー（名水 天皇の水）

長浜市高月町は美しい用水が流れる「水の町」である。左手に水瓶を持つ向源寺の国宝十一面観音立像はあまりにも有名だ。そこから少し東へ北国脇往還（国道365号線）を進むと高時川と交差する。阿弥陀橋を渡り直ぐに北上すると辺りは田園地帯となる。ここは馬上と書いて「まけ」と呼ぶ。東に山田山が見えその谷筋めざして更に山裾へと続く道を行くと名水への案内表示が現れる。私は数回訪ねているがいつも鬱蒼としており気味が悪い。しかし「名水天皇の水」と記された案内板があること、地域の住民の努めであろうか掃除が行き届いており、名水への導きは明快だ。自然石で積み上げた水路を数メートルたどると直径三〇センチ程の石灰岩の割れ目を発見できる。そこが水源だ。日の光がほとんど入らないこの雰囲気での水場は威厳を感じる。背後には寺跡が有る。名称が掘られた立派な石碑はあるが由緒書のようなものはない。『高月町のむかし話』（高月町教育委員会編）による面白い伝承を見付けたので紹介したい。

徳川時代の始めの頃、馬上の伍井という人の跡取り息子が、原因のわからない病気にかかりました。両親が医者に診せるなどして、一生懸命看病をしますがどんどん悪くなるばかり。ある夜、看病疲れでとうとうとした母親が「北馬上在

の谷の東北の岩の間から美しい清水が湧き出ています。その水を、夜丑の刻に汲んで、盃に二、三杯飲ませる行を百日続けなさい。」というお告げを聞いたのです。両親はすぐお告げの場所を探し、息子に清水を飲ませ続けました。そして百日目……。目の前に仙人が現れ、「よくぞ百日の行を続けた。御神助間違いない」と言い残すと消えていきました。すると不思議なことにあれほど重かった息子の病気が日に日によくなったということです。その湧き出る場所を「テンオー」といいましたが、日本の天皇の名を借りて

「天皇の水」と名付けたということです。以来、人々の臨終前に「天皇の水」を与えると、極楽往生が出来ると言われるようになり、年寄りの人達は平時でも「天皇の水」を汲み帰り、生涯の幸せを感謝しながらその水を賞味する人が沢山あります。この水は、どんな旱魃にも、一度も涸れず、天皇の水は郷人から恵みの水として、尊ばれ、伝わる事でしょう。（部分的に編集）

とある。現在はこのような伝承と石碑の存在が名水の名称を伝えているが、「テンオー」と呼ばれていたのであろうか。この辺の人で木ノ本の造り酒屋の職人で兼業農家の人に話を聞いてみると馬上周辺に湧水はあちこちに有ること。「いつも汲んでいるけど、名前のことなど意識したこと無いです。」と即答された。

これまで、「近江の水をめぐる」において、比較的名称の存

在を重要視してきた。その理由に唯一無二の存在であることと使用する住民の水に対する意識の高さや信仰心に近いものがあるのではないか、という私自身の捉え方でこのように考えてきたわけである。しかし今回とり上げた水で少し考え方が変わったように思う。それは名称がついている水は地域の住民以外を対象とした意識が既に備わっており、観光や環境保全、教育などの観点からとり上げられ「近代社会においての位置付け」という印象が強い。それが悪い事とは思わないが、地域住民が伝承や祭礼と共に受継いでこられた水は他ならぬ水であり、くらしそのものである。「呼び名や音」で自然に残っているものであって、何かと区別する為の名称というものでは無いのだと感じた。

くらしと一体化している水に、名称など関係ないのかも
しれない。



山田山の西側麓へと続く道



名水への導きが明快



石段最後の割れ目より水を汲む

二、帯の水、群の水（たいのみず、ぐんのみず）――

地域一帯が湧水群であり、一つひとつに名称をもたず、地域のくらしを含めて周囲がひとつの湧水帯になっているものをとりあげていきたい。

針江地区や伊吹山麓、醒ヶ井付近、安土常楽寺など、比良山系の麓に至っては無数の湧水が群を成している。その一つひとつに名称が付けられているものも有るが、ここでは地域内に数カ所の水場が存在し総称として呼ばれている水を見ていきたい。

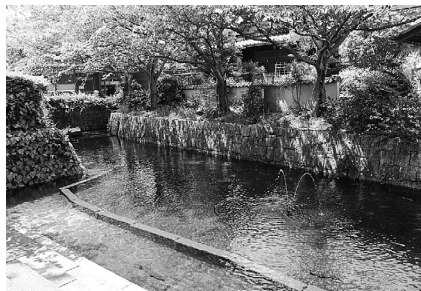
浅小井湧水（あさごいゆうすい）

県道2号大津能登川長浜線を近江八幡市内から東へ安土方面に行く途中、浅小井町という交差点に差し掛かる。そこをびわ湖方面に入ると浅小井地区だ。西の入口付近に東屋が建っており、中を覗くと三メートル四方の池の中心から水が湧き出ている。周囲は石段とベンチが用意され湧水公園に迎え入れられるような雰囲気だ。横には「上（かみ）の湧水公園」と表示された石碑があり「あさごい湧水マップ」が描かれている。導かれる様に集落へ進むと水路が廻らされ、周辺には植木や花が植えられ気持ちが良い。集落の中央部に来ると方形の池が有り石段で囲われている。鯉や鴨が飼われ、二本の噴水が設置され「リフレッシュ浅小井 湧水の里」の表示が立っている。地区で長年まちづくりをされてきた南喜蔵（みなみきざう）さんにお話を聞く事が出来た。愛知川の伏流水により旧蛇砂川（きゆうへびすながわ）の河川敷で豊富な地下水に恵まれ、昭和三〇年代まで船だまりとして掘割の往来時の面影を復元しているそうだ。ふと考えると県道2号から入ったので気付くのに時間がかかったのか、ちょうどこの集落の北側には西の湖がある。今日もヨシが群生しており、総合開発のあたりから免れた地域であることが想像できる。更に東へ少し入ったところに「お池さん」と呼ばれる湧水が東出地藏堂の横にある。ここには全部で五カ所の湧水があり、地域と一緒に共創されて今日に至っていることがわかる。再び中央部に戻ると平成四年七月に「くらしに根づく施

設」として受賞した建設省の「手づくり郷土賞」の銘板入り石碑を発見した。まちづくり計画は一旦落ち着いているようだ。南さんは「自然に水辺に寄り添って暮らせることが大事なんや。」と話されたのが印象的だった。浅く小さな井戸が多く吹き出していた地、浅小井湧水である。



お池さん



湧水の里



東屋で水を汲む

軽野湧水（かるのゆうすい）

中山道愛知川宿から県道28号へ入り、近江鉄道踏切、新幹線高架をこえ、東へしばらく車を走らせると自然石を積んだような常夜灯が見える。香之庄（このしょう）交差点を左折、県道218号を北上し、宇曽川を渡ったあたりが軽野地区である。少し進むと左側にフェンスが見える。近づくにエメラルドグリーンの水が光っている。興奮覚えやらず覗き込むと五メートル四方に古い石垣が組まれ、水深三メートルはあるうか、沢山の魚影の向うに自分の顔が映っているのがわかる。すっきり虜になっていると農作業されているお婆さんにお会いした。「道の向うにもあるで！」と案内されると同じくらしいの水場が現れた。しばらく立ち尽くしていると、「夏はひゃっこいで冬は温たいは！皆こからで洗い物などしてますねん。」と「嫁いで来た時にはもうあったで！」と話された。いろいろ水場を見て来たがこんなに美しい状態で今に伝えている水場は稀である。集落を散策していると軽野公民館に着いた。ここに「軽野地区湧水を中心とした概要」と記された案内版を発見した。湧水分布図と大正二年の御池改修事で石垣工事の写真が掲載されていた。読むと鈴鹿山系の伏流水がいたる所で噴出しており、大小合わせて約二〇カ所にも及ぶ。「沓の湧」「今池」「御池」「新池」「藤治川」と大きな池が石垣に大木の梁を渡し人力で整備された事が記されていた。集落内の家庭においては出垂や川端として取り込み生活の糧としていたようだ。平成二〇年七月には「かる



公民館の案内版



新池



出壺で遊ぶ子供たち



藤治川にてお婆さん

の湧水湿原景観保全会」を立ち上げ湿地保全と自然保護の取組みを進め、平成二年には「うるおいのあるまちづくり事業」、軽野地区を「わき水の里」自然と先人が残した農村文化遺産として見つめ直している。その軽野が湧水と共生する意を示す案内板は平成二三年三月に設置される。

水を介し今日に至ってまちづくりを展開、持続する大物の湧水群である事は間違いない。

川合の自噴井（かわいのじふんい）

長浜市木之本町川合は木ノ本市街地の、東横町より東へ、国道303号線を進み高時川を渡ると交差点に差し掛かる。そこを左（北）へ県道285号線を進むとこの道沿いが川合の集落である。左右を見渡しながらか進むとコンクリート製の槽が家の軒先に設けられている。ご近所同士、共同で使用されているのであるうか、錦鯉が飼われている水場も有り、ゆったりとした空気が流れている。もう少し行くとY字路になったところに円筒状のコンクリートの水場を発見した。ペットボトルを途中で切ったような透明の容器が数個、円筒の途中から注ぎ口が出ており、そこから音をたてて水が出ている。その水を受け止める鍋が置かれていた。交差点の合流地点で県道表示と並ぶ様にすることが何とも滑稽である。あまり人影は見かけないが、くらしを感じる光景である。合流点を左に少し行くと先程渡った高時川の源流が北西方面から、杉野川が北から合流しており、な

るほどそれで「川合」か、と納得した。高時川の川筋に沿い、谷間の段丘に並ぶ様にして佇む集落はおそらく用水に不便したのであるう。水に触れてみると金気が混じっているように感じた。杉野川沿いの岐阜県へと抜ける道沿いにも同様のコンクリート製の自噴井をいくつか発見した。地域で共有しながら活用してきた水である。

集落一帯が湧水群、あるいは同じ水系の水であり総称として呼ばれている水場に迫ってみた。冒頭に記した様にこの手の湧水群はまだまだびわ湖の周りにたくさん存在する。今回に留まらず注目して行きたい「帯の水、群の水」である。



鍋に溜まった水を汲む



県道285号線と岐阜方面への道の合流点



県道285号線と岐阜方面への道の合流点

三、参りの水、頼みの水(まいりのみず、たのみのみず)――

「お百度参り」や「苦しい時の神頼み」という言葉をこれまでも何度か耳にした。私自身は前者のように何度も参った記憶はないが、後者で、何も打つ手が無くなった時に神仏の前で何度も手を合わせた記憶も多々思い出される。

今も昔も庶民は、理由はともかく只々無心で参り、頼み事をして辛い時や苦しい時を乗り越えて来たのではないだろうか。

神仏います近江にも様々な庶民の拠り所があるが今も昔も庶民の味方であるご利益の御神水に迫ってみた。

長濱八幡宮の御神水(ながはまはちまングうのごしんすい)

JR長浜駅から表通りを東へ市役所前の交差点を左折し、二筋目の角の敷地に広がる場が長濱八幡宮である。表通りに面していないのでここからが御神水を探し出す本番になる。八幡宮の拝殿に向かって左側に建物と放生池が有る。その間にちょうど人が一人通れる程度の小道があり、前に「御神水」と記された立て札が発見できる。その奥に竹筒から勢いよく流れ出る湧水が御神水だ。初めて訪れた時は三〇分程境内をウロウロし、見付けた時にはあまりにも水場の空間の狭さにその場で笑ってしまったことを思い出した。

立て札には

「千古の境内を巡りて、命の源として放水池に流れ込む当宮の御神水は非常に靈驗あらたかで、早朝より汲みにこられる方は後を立たず、お茶や御飯炊きに用いられ健康に過ぎられ、又病氣の方は飲用されることによりその災いを快方にむかわせるとも言われる

人知れず清々しくも祖の心か神の水なり」

と記されていた。八幡宮にはもう一つ不思議な水場が有る。

私が御神水を探し当てる前に間違えて認識した銅葺きの立派な東屋があり周囲は木製の格子柵で覆われ入る事の出来ない井戸が有る。その中に緑色の釉薬が施された陶製の取水口があり、常時一定の水がチョロチョロと流れ出ている。欄干の山根さんの話では「清々(せいせい) 井戸」と呼ばれ、以前は出水舎で



清々井戸（長濱八幡宮）



長濱八幡宮の御神水を汲む



清々井戸の東屋（長濱八幡宮）



放生池の脇に御神水の札がある

あったが、はだか祭の時、若衆が身を清める場であり、長浜曳山祭りでは、子供歌舞伎役者の健康とくじ運を祈願して水ごいが行われるとの事である。

建部大社の御神水（たけべたいしゃのごしんすい）

言わずと知れた近江一之宮、建部大社にも湧水の御神水が存在したのでここで紹介したい。旧東海道を大津石山側から歩き、瀬田の唐橋を渡って東へ、神領の交差点を直進すると建部大社の石碑が見えて来る。官幣大社の文字にコンクリートが埋め込まれているのを見ると、この社の大きさが増して伝わってくるのは私だけであろうか。向かって左側に大きな石の鳥居と数本の松が迎え入れてくれた。日本武尊と大己貴命（おおむなちのみこと）をお祀りし、出世開運、除災厄除、商売繁盛、縁結び、医薬醸造の神として広く崇敬されている。神社の由緒は尽きないのでここで止めておくとして、問題の水場だ。二之鳥居から参道を歩いて神門へ着く。ひと息おいて中へ入ると目前に拝殿が有る右側に三本杉、左側に社務所が見えた。この辺りをウロウロしていると「ポコポコ」とそれらしき音が聞こえてきた。木陰の奥まったところに六〇センチ角程度の石の井戸を発見。その先端から水が常時溢れ出ており、井桁の上に柄杓が数本並んでいた。石には御神水と彫刻されている。欄干の大宮さんにお話を聞くと、ご近所の方々や病を患っておられる方が汲みにこられるそうだ。水源のことなどもう少し聞き込むと快く返答



社務所の脇にある建部大社の御神水



御神水の水を汲む筆者（建部大社）

して下さった。境内の北東方向に位置する宝物殿の裏側に実は溢れんばかりの水が今も湧き出ており、池などに分水されているとの事、湧水の御神水である。「そのご利益は参られる方々によって様々ですが、金運ということでしょうか」と。祭神である日本武尊は日本で初の千円紙幣に描かれ、また左に描かれた社殿は建部大社本殿が採用された。昭和二〇年八月に発行され、最も多くの刷色を用いてつくられたそうだ。

近江国府がおかれ、東海道瀬田の唐橋前、そして生命の源である水が溢れ出ていた場所、このような全ての条件が揃うところに一之宮がおかれ、金運が廻ってくるのだと。



拝殿の右、宝物殿の裏側に源泉がある。（建部大社）

日吉大社の亀井霊水（ひよしたいしゃのかめいれいすい）

大津市坂本、比叡山の麓に鎮座する全国に約二、〇〇〇社ある日吉、日枝、山王神社の総本社である。お山の上の延暦寺と共に信仰を今に伝える神仏習合の極みと言って過言ではないだろう。日吉大社は東本宮と西本宮をはじめとする山王七社がご祭神として祀られている。今回紹介する「亀井霊水」は地主神である大山咋神（おおやまくいのかみ）を祀る東本宮の敷地内に湧き出ている。厳密には樹下神社と新物忌神社の間に石柱で四角形の枠で囲み格子状に汲まれている。さらにその内部は六角形の井戸が組まれており、よく見ると、水が揺らめき湧き出ているのがわかる。境内の景色を写しながら、ご利益の気持ち

で投げ入れられた銀色の円がキラキラ光っている。
横に立て札があったので読むと

「昔、ここは池があり、伝教太師参拝の折、靈亀が現れた。
占いによりここを閼伽井（仏様に捧げる水を汲む井戸）と
なし、『亀井』と名付けられた。最名水也 『日吉山王權現
知新記』より」

と記されていた。欄宜の矢頭さんにお話を聞くと、大物忌神
社の脇からも水が流れており同じ水系との事、神社内では大行
事水と呼ばれているそうだ。

「お山に染込んだ水が湧き出し、ここで神仏に捧げる水を飲
水できることがご利益なのではないでしょうか」と話された事
が印象的でした。

日吉大社にはあまり知られていないが、もう一つ重要な謎の
湧水が有るようだ。しっかりと調べて後述したい。

今も昔も庶民にとって現世利益の象徴のような、水を取りあ
げた。中でも「御神水」は近江にはまだまだ無数に有る事は言
うまでもない。そこで我に帰って考えてみた。絵馬に願ひ事を
具体的に記す事や、御札に祈願を記す事は他力ではない自力で
世の中に訴えかけている様に感じるのだ。古人が自分の願ひや
思いを書き記す事によって、世に訴える事が出来る唯一の手段
であったのではないだろうか？ご利益の印となる水と交換する
（或は飲水する）ことで何とか自分の気持ちを鎮めていたのだ

はないだろうか、とさえ感じ
るのである。

コミュニケーションの方法
が多様化した現在、本当に
我々の抱えている願ひや思い
がきちんと表現され、相手や
世間に伝わっているのであろ
うか。「参りの水、頼みの水」
を企てながらも一度自問し
てみた。



亀井霊水に繋がる大行事水で水を汲む



亀井霊水と大行事水



六角形の井戸

四、伝の水、宝の水（でんのみず、ほうのみず）――

数多くの伝承や地域の宝となっている水を見てきた。先述した神社の御神水に続き、近江には数多くの寺院が存在する。仏教母山の存在と太湖の關係は今日の近江に恩恵をもたらしている事は言うまでもない。日本文化の繁栄の起源はこの地で栄えた信仰と流通によって育まれたくらしにあると言えよう。その聖地は伝承と信仰の対象であり地域の宝として支えてきた原点の水に迫ってみる。

弁慶水（べんけいすい）比叡山延暦寺

比叡山東塔にある法華総持院から北西方向に坂道を進むと、老杉の間から東屋が見えてくる。普段は鍵がかけられているが、お寺の許可を取って中を見せていただき、儀礼に習って汲水したことがある。中は湧水が周りの土を崩して埋まってしまわない様、石柱で井桁に組まれており、のぞくと水面に顔が映った。付近には天台寺門宗の開祖、智証の住坊であり比叡山で最古の仏像とされる千手観音像が祀られていた千手堂とも呼ばれた山王院がある。ここは大比叡の尾根から下った窪地に位置しており、ちょうど平坦な地形が始まる場所である。おそらく水が溜まり易く、豊富な水が湧出していたのであろう。過酷な環境の山において厳しい修行に耐え、仏に供える水が確保できることから聖地としてこの地を選択したにちがいないと想像した。「千

手水」「千寿水」「弁慶水」など多くの異称を持つ閼伽水であるが、それらの由来を「山門堂社由緒記」からみてみると、

山王院千手大士の閼伽水なり。（千手水）寛平法皇、かつてこの水を抱（く）み勅して千手水（又は千寿水）と号す。（千寿水）武藏坊弁慶、一千日夜に勇力を大士に祈り、この水を用って浴身す。（弁慶水）平相国清盛、熱病の時この千手水を以って浴す。

と記されている。住職の武円超（たけえんちよう）さんにお話を聞く事が出来た。比叡山のお水はこの弁慶水が優先で使用される大切な水であると話された。お山の生活を支える命の水、仏に供える閼伽水として当然の如く、密教の教えより阿闍梨からその資格を得る為の儀式である伝法灌頂（でんぼうかんじよう）においてこの水が注がれる重要な水であるとお話しされた。この辺は針葉樹が生い茂る事より水が溜まりにくい筈だが不思議であるとも付け加えられた。

最後に「この場所に水が出ていなければ延暦寺の存在も、今日の我々の存在もなかったのでは」と話されたのが印象

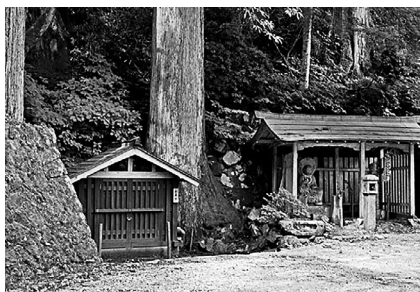


弁慶水を汲水していたく

的だった。この他、お山の中には無動寺谷に「関伽井」横川中堂の側に「如法水・によほうすい」横川の道元禪師得度の遺跡に「独股水・とっこすい」がある。



石で組まれている弁慶水



杉の木の根元にある弁慶水

塩谷の水（しおたにのみず） 塩谷山洞寿院（えんこくざんとうじゅいん）

国道365号を北上、余呉支所前の交差点を東へ途中一時、北国街道と交わりながら北陸自動車道をくぐると県道284号になる。高時川と合流、丹生川と名前を変えさらに北上すると菅並の集落に入る。その最深部に六所神社が現れる。分かれて妙理川に沿い少し谷をあがったところに曹洞宗の古刹、塩谷山洞寿院護国禅寺がある。

辺はまっすぐに延びる杉が生い茂っており、山門が迎えてくれる。水場はその山門の右手山側にある。初めて訪れた二〇一〇年の冬は豪雪に見舞われ辺り一面雪に覆われていたが、湧水ポイントは周囲の雪を溶かし、「ここぞー!」と言わんばかりに直ぐに発見する事が出来た。その手前には地元の方が立てたのであろうか、「みんなの塩谷の水」と書かれた表札が立っている。見上げると側に赤い前掛けをした観音さまが吹雪に耐えていた。水は勢い良く流れていたことを覚えている。その後何度か訪問しているが、いつも杉の木漏れ日を浴び、苔むした中の水場は美しい。

応永十三年（一四〇六）如仲禪師（によちゅうぜんじ）による開山。山号は、この地が中国五台山に似た景勝地で、谷水に塩分があり修業に便利であった。洞寿という名の由来は、遷洞長寿「幽仙に移つて長生きする」からと伝わる。住職の竹内昭道（たけうちしょうどう）さんにお話を伺うと、寺に二つの宝物が伝わっているという。ひとつは如仲が退治した龍が、枕元に現れ置いていった玉と伝わる「龍の玉」、ひとつは白山権現のお告げがあり、一夜にして湧いたという塩泉の「塩之華」である。これは「ソフトボールくらいの大きさで珊瑚礁のような感じだ」と、塩谷という名が地名となり、山号となり、その水は現在も正月の若水、関伽水として供えられていると最後に話された。



聖観音の奥にある塩谷の水



塩谷の水を汲む



山門の側にある塩谷の水

善水（ぜんすい） 岩根山善水寺

JR草津線甲西駅より市街地を越えると野洲川に出る目前に東西に細長い山容が見える岩根山十二坊と呼ばれるこの地はかつて仏教修行の道場して栄えていた様である。甲西大橋を渡って道なりに車を走らせ案内に導かれて進むと山の中腹に善水寺が現れる。或は岩根の集落から山を登ってお寺に入る事も出来る。

この寺を訪れた人はこの湧水のことを知らずして山を下りる人はいないであろう。本堂の東側に百伝（ももつて）の池がありその奥に湧水がある。まえには立派な石碑があり所以が示されている。

「善水」とは、医王善逝の御香水（いおうぜんぜいのおこうずい）と呼ばれ、医王とは薬師、善逝とは如来の意味があり、傳教大師は百伝の池水をもって薬師如来の宝前にて医王善逝の秘法を修する事七日間、桓武天皇の病氣平癒を祈念され、忽ちの内に快癒されたことから「善水寺」の号を賜ったものである。すなわち、善水とは百伝の池水を元水として、本尊薬師如来の宝前にて医王善逝の秘法にて祈願した水のことである。と、ここまでがよく知られている話。

住職の梅中堯弘（うめなかぎょうこう）さんにお話を伺うことができた。言い伝えでは、この辺は水が少なく雨乞いのため最澄が周囲を見ておられた。すると光がさす場所があり、その場に行くと水面に梶の葉が浮いていた。不思議に思っ葉をめ

くると経文が表れ「是好良薬今留在此（せこうろうやくこんるざいし）とあった。また水面の池より一寸八分程の閻浮壇金（えんぶだんごん）の薬師仏が現れ、七日間の雨乞祈祷の末、大雨をもたらしたとのこと。また地域伝承では本堂の北側に山のピークがあり、そこに医王山の壺があるそうだ。もう一つ、雷岩と呼ばれる岩があり二手に分かれてそこで「雨乞いの唄」を歌う風習が以前あったと聞く。その詩を覚えていた方が亡くなられてしまい、非常に残念だとお話しされた。

繰り返すが山号になるほど、この水もまた、お寺にとって、地域にとっても非常に大事な水である事がわかる。この地においても水があつての今日まで営みなのかもしれない。

名水百選に並ぶ、いやそれ以上の様々な時代や職種の人々に関係をもたらしした超横綱クラスの水に迫ってみた。湖北、湖西、湖南と三方所とりあげたが近江には数えきれない程の伝承を持った水と地域の宝物のような存在として水がある。以前、人物と伝説という観点でもとりあげたが、個別的な意味合いが強かった。対して今回は寺の山内にある事から、時代を超えた普遍的な意味合いの強い水を対象とした。自然からの恩恵を受け、その事から始まる様々な営みや育みが日本人特有の自然観であり宗教観であると考えている。私は美術家であるが、近年ここに焦点をあてて行く事がテーマになっている。



善水の由緒書



善水を汲む



百伝（ももつて）の池の奥に善水がある

追記

二〇一二年十二月より滋賀県文化振興事業団が発行する「湖国と文化」に「近江の水をめぐる」と題して近江の湧水を写真と文で紹介する機会をあたえられた。現在まで十三回の連載が継続されており、十回から十三回の四回分のオリジナル文章が可能な限り残し、近江学研究紀要として再編集した。紀要の冒頭は二〇一六年一月現在における私自身の現況報告から始め、次に地域の人々が音で覚えて、呼び名で通じている「音の水、呼びの水」、湧水一つひとつに呼称はないが地域一帯と湧水群が一体となっている「帯の水、群の水」、神社の境内にあり湧水そのものが庶民の信仰の対象である「参りの水、頼みの水」、寺院の山内にあり仏に授ける闍伽の水や地域の宝物のような存在となっている「伝の水、宝の水」に焦点をあてた。

冒頭にも記したが近江における水研究は自己の造形表現から出発した。生命体に必要不可欠な水、それを「全体の水」として一先ず捉え、近江においては地域にある特徴的な性質をもつ唯一無二の存在としての「固有の水」として捉え、言語化してきた。毎回共通するテーマを儲け、三〜四カ所の共通点をあげてきたが、単なる場所や周辺地域、水場の紹介では事足らなくなってきた様に感じている。

我々は様々な豊かさをここ数年のあいだで獲得してしまった様に思う。それは人間が「生きたい。生き延びたい」という欲

望を持つ限りいつの時代も尽きないものであろう。スマートフォンは今日、人と人を繋ぎ止めるツールとして全く手放す事の出来ないものに成り上がってしまった。個々が別々の時間、場所を過ごしながら情報を共有できる代物である…。

話は少し飛躍するが桶に残る水がどの程度残っているかを生活しながら計っている時代があった筈だ。その水の汲み時がいつか暗黙の了解で通じ合う事が出来たのではないだろうか。我々はそのような勘を働かすことが出来なくなってきた様な気がする。不自由さの中から想像、創造する力が働き、様々な感覚のセンサーが働いたのであろう。

水研究に取組み、現場リサーチや聞き取りをしていると、くらしの知恵や工夫が随所に見受けられる。水場周辺の仕組みや簡単な道具などがそのヒントを伝えている。

成安造形大学附属近江学研究所紀要 第5号

発行日 平成28年3月24日

発 行 学校法人京都成安学園 成安造形大学 附属近江学研究所
〒520-0248 滋賀県大津市仰木の里東4-3-1
電話 077-574-2118

発行者 木村 至宏

編 集 成安造形大学附属近江学研究所

印刷所 宮川印刷株式会社

©Seian University of Art and Design 2016

ISSN 2186-6937